

Eureka X

六年制通信 No.12 令和4年6月24日(金)号

桃李言はざれども…

何年前でしたか、すっかり忘れましたが、確かNHKで若者の悩みに大人が答えるような番組があったように思います。要するに、若者は学校や大人に対する不満があって、それに教育評論家など、いつの間にか大人代表みたいな顔をした人たちが、答えるものでした。大人は(先生は)命令するだけで僕のことをわかってくれない、私は誰からも愛されていないなど、つきつめれば二つ、自由が欲しいということと他人から愛されたいということ。若者にとって学校も大人も何かしら自分たちを強制するものであって、そういう者たちから自由になりたいと。また、自分は孤独だからどうにかして(全く自分が傷つくことなしに)他人の関心を自分に向けたいと。評論家たちはそれらしいことを述べていましたが、概ね若者に対する大人の無理解を嘆き、自分たちも昔はそう思ったという感想を言っていたように思います。私には若者に媚びているようにしか映りませんでしたけど。また、テレビに出ていた若者たちは服装と髪型は奇抜でしたが、話し方も内容もステレオタイプでつまらなかったなあ。

私はテレビを観ながら、若者には本当に自由であることの怖さを教えるべきだと思いました。また、愛される者はそもそも自分と他人とを愛することのできる者だということも。そして、愛情だけは与えても減らない不思議な性質を持っていて、それを実践してくれているのが親だということ。親や親戚以外の者から愛されるとしたら、その人の中身がよほど魅力に富んでいるわけです。どこの誰かもわからない、内容のない人間に関心を寄せ愛するなんてことは普通起こらない。そう思いませんか。

愛情が欲しい、自分のことがわかってほしいと本当にそう思うなら、まずは他人に愛情を持ち、関心を寄せるくらいの余裕がないといけませんね。時間がかかるかもしれませんが、うんと勉強して自分を鍛えましょう。焦る必要はありません。魅力のある人物には人は興味を持ち、放っておいても人は集まってきますからね。

成蹊大学というのが東京にあります。安倍元総理の出身大学として有名ですね。この「成蹊」の「蹊」は「こみち」の意味です。「小道を成す」で「成蹊」。これ、『史記』の「李将軍列伝」にあるというので探してみたら、うちの図書館にある『新釈漢文大系』の「列伝」にありましたよ。「李将軍列伝第四十九」(401頁)でした。原典に当たるのは大切ですね、時間はかかるけど。前にも言いましたが、ad fontes(アド・フォンテス 泉に戻る=原典に当たる)を忘れてはいけません。ちなみにネットの情報は、いわゆる孫引きだらけと言っても過言ではないので、まず信じてはいけません。ウィキペディアの情報を基礎に大学で講義している先生が今はいるそうですが、そんなゼミ

に入ってはいけません。原典を自分の目で確かめること、忘れないでくださいね。

さて、実際は「桃李言はざれども、下自ら蹊を成す、と」とありました。読み方は「とうり、ものいわざれども、しも、おのづから、こみちをなす、と」です。李將軍は立派な軍人だったのでしょうね。「上に立つ人自身の行いが方正であれば、命令を下さなくても何事も実行され、その人の行いが正しくなければ、たとえ命令を下しても聞き入れられない」という古書の言葉を引き、これは李將軍のことだ、と。そしてこれを補強するように「桃李…」の例を引いています。「桃や李(すもも)の樹はものを言わないが、その木の下は自然と人に踏まれ小道ができる」とは「桃や李は自分を主張しなくてもその花の香りに人は引きつけられ、自然と多くの人が集まってくる」という意味でしょうから、人間に当てはめると「徳のある人物は弁舌を振るわなくても策を弄しなくても人徳によって人は集まる」というくらいの意味でしょうね。私は孤独だ。自分は誰からも愛されない、自由が欲しいなどと桃や李は言いません。しかし醸し出す香りは(魅力は)人々を引きつける。素敵ですね。

ちなみに、成蹊大学の創立者中村春二は明治10年の生まれ。これくらいの時代に生まれた日本のインテリ層は、『史記』を読んでいたのでしょうか。彼らの教養の深さに圧倒されます。いつもながら、文明の発達と引き換えに失ったものの(それはもう絶対に取り返せないであろうものの)大きさに呆然としてしまいます。

今週のおすすめ

・麻生圭子 『京都暮らしの四季』 (文春文庫)

単行本発売時の表題は『京町屋暮らしの四季』です。単行本も文庫本も副題のように「極楽のあまり風」という言葉が表紙に書いてあります。いい言葉でしょ。私、大好きなんです。こういう表現を生み出した我が民族を誇りに思います。日本の夏は暑いですよ、湿気もあるし。クーラーも扇風機もなかった時代、竈(かまど)の前で煮炊きするのは苦行だったでしょう。しかし、たまに何の加減か、涼風が頬を撫でることがあります。そういう時「ああ極楽のあまり風や」と、昔の人は口に出したようです。私はこの言葉を同じ題名の別の本で知りました。しかし、使うことはなかったです。この夏から使います。君たちも使いましょう。親御さんも是非一緒に。

この本は東京暮らしの著者が京都へ引っ越し、やがて町家に住み、作詞家の目に映る京都の四季を、作詞家らしく鋭敏な感性と的確な言葉で綴った本です。町家がどのようなものなのか、時々テレビで取り上げられていますから知っている諸君もいるかも。ま、読んで想像してください。ちょっと京都に観光に行つてここに書いてあるような風情が味わえるなんて、それは無理です。やはり、活字をじっくり味わって想像してみるのが一番かと思います。ただ、例えば「漆と葦戸、庭の棕櫚竹(しゅろちく)が心を寄せ合つて…」などという表現は映像を見なければ想像もできませんね。こういうのは調べてみなければダメです。わからないことが意外と多いけど…。

ちなみに、徳永英明の名曲「最後の言い訳」の歌詞を書いたのが麻生圭子です。

BGMは 徳永英明. の 最後の言い訳 でした…。